

おさか医科・
歯科九条の会

小田実氏が平和講演(大要)

「アメリカと今いかにつきあうか」

安倍内閣、自民・公明の両党は、改憲準備として国民投票法案の今国会成立を狙っている。提案されている国民投票法案は、「最低投票率の基準がない」「投票一週間前までは有料広告・宣伝のし放題」など、改憲を強行しようとする勢力に都合のよい中身となっている。9条改悪策動が強まるなか、おさか医科・歯科九条の会が昨年11月23日に作家の小田実氏を招いた講演会の大要を掲載する。(編集部)

米国民がブッシュに「ノー」

民主が中間選挙で勝利

世界的な動きの中で、アメリカの動きが大切だ。否応無しに、我われはアメリカとくっ付いて動いている。アメリカの中間選挙では、民主党が上院・下院選挙において勝利するという画期的な大変動が起きた。米国民は、ブッシュ政権が行ったイラク戦争に対して「ノー」を突き付けた。ブッシュ政権は、一番大事なイラク政策を変更せねばならないところまで追い

一票の力が変化起こす

アメリカの大変動を起したのは選挙だ。選挙で起したのは、1945年のイギリスの選挙。第二次世界大戦が終結した直後、イギリスで

小田実(おだまこと)プロフィール 1932年大阪府福島区生誕、夕陽丘高校、東京大学、ハーバード大学留学、「何でも見てやる」「平和をつくる原理」「ベトナムの影」「民の論議、軍の論議」「西ベルリンで見たこと、日本で考えたこと」ほか多数刊行



だった。しかし、イギリス国民は1945年の戦争が終結に近づいた総選挙において、彼を首にした。日本人なら何となく功労者だからと言って、チャーチルを選んだだろう。しかし「もう戦争は結構だ。あなたは要らない」ということを選挙の力で平然とやってのけた。そして、社会福祉政策を掲げていた労働党が当選させ、労働党政権が出来上がった。革命闘争をしたわけではなく、流血の惨事になったわけでもなく、投票で「もう要らない」と言っただけだ。私はこの意味をもう一度考え直すべきだと思う。アメリカの中間選挙の結果は、イギリスほどで

いが、アメリカの大変動に対して日本の対応は割とのんきなものだ。安倍政権もマスメディアも、アメリカが大変なところまで平然とやってのけていない。私はそこから少し考えてみたい。

総選挙があり、大変動を起した。当時、イギリスの戦争政策を強制的に実行したチャーチルは、ナチスドイツを滅ぼしイギリスを勝利に結びつけたまさに戦争政策最大の功労者ともいえる人物

はないが、かなりの変化をもたらしたのは事実だ。一票の力は、革命的变化を起す力をもってしていることだ。政策を決定し、戦争を指示する人を「大きな人間」だとすると、大多数の人は「小さな人間」だ。イギリスで「大きな

庶民の選択を具体化するのが政治家

「基地をなくせ、福祉を充実させろ」などと言っていると、テレビの論客や新聞の論議委員の人間は「具体的にどうするのか」と言っが、それを考えるのは政治家や役人の仕事だ。庶民の選択があった上で、それに従って具体的な方策を考えるのが政治家や役人だ。我われが彼らに付き従っているのではない。

「虫の視点」で自由に世界を見よう

このことをはっきり示したのはイギリス国民だ。チャーチルを首に

私がベトナム反戦運動などしている中で、よく「小田さんたちは、鳥の視点・鳥瞰図に対して地を這う虫の視点・虫瞰図」と評価半分、けなし

半分の言い方をされた。しかし、いま私たちに「地を這っている虫の視点」が、鳥よりもはるかに自由だ」という発想の転換が必要である。

テレビの論客は「鳥の視点」で下を見て小さなことばかり言っている。この政権はどうなるかと、北朝鮮が核を持ったかどうか、そんな話ばかりしている

が、もっと将来を見れば、もっと広い世界があるじゃないか。だから、我われが今必要としていることは、一方的に流された情報からではなく、「虫の視点」で自由に世界を見ようじゃないかという事だ。

今こそ日本国憲法が生きる 紛争は戦争で解決できない

今のイラクは、武力で押さえつけるだけの政策が泥沼にはまり抜け出せなくなった。アメリカ国民は、ブッシュ政権に「ノー」を突き付けた。アメリカはぼろぼろの体で出て行くのだから、いよいよもって收拾がつかないところになっている。大局的見地に立つて情勢を捕らえるならば、「虫の視点」で見ないと

いけない。戦争で解決しようとしても紛争は絶えず起る。平和をもって解決しなければならぬ。今こそ日本国憲法が生きてくるのではない

日本国憲法を重視することで、力を平和的に発揮する機会に来ている。しかし、日本政府はアメリカに追随し憲法をやめて軍備を増強するとか、どうしようもないことをいまだに言っている。もう一度、憲法に基づいて考え直さないといけないとわれの状態なのだ。

全世界の未来に非暴力を訴え

憲法は、小さな人間の立場を非常に強く押し出している。私がこの憲法を世界で冠たる憲法だと

思うのは、世界の憲法にないものが3つあるからだ。1つは前文。2つ目は第9条。3つ目は24条

と25条である。前文には何が書いてあるか。「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」と言っている。現在の世界は、専制と隷従、圧迫と偏狭が満ちている世界、つまり、ろくでもない社会なので戦争が起る。だから、これを変えようと言っている。この社会を変える手段は、まず「非暴力」をもって行うと堂々と謳い上げているのが前文だ。

世界的使命、普遍的に世界全体の未来のことを前文にしている憲法など全世界に存在しないのだ。日本国憲法は世界全体の未来を話している。1945年8月の段階において、日本は全世界の敵であり、一番指弾されている悪い国が一番いいことを言ったのだ。我われは悪いことをしたから、見えるものがある。あなた方は見えていない。だから、見えるものをあなた方に教えるという事だ。一番悪いことをしていた犯人が、悔い改めて善人に向って「お

前分かっていないだろう」と言ったのだ。一番威張っているすごい憲法だ。「悪いことをしました。すみません。土下座します」と言っている憲法ではない。非常に珍しいし、前文は非常に大事だ。だから、子どもに「こんな威張った憲法はない」と教えてほしい。へりくだって、押し付けられた憲法ではない。全世界に向かって非暴力を押し付けているのだ。戦勝国に向かって、アメリカ力に向かって言っているから大事なのだ。